

## 卷頭言

本年三月末、香川達夫先生と林深山先生は、定年を迎えられ、退職なさった。そこでわれわれは、本号を両先生に捧げる特別号とすることとした。

香川達夫先生は、一九六二（昭和三七）年四月一日、本学政経学部教授に就任され、以後三五年間、研究・教育・大学行政において活躍された。先生の右御就任は、政経学部が法学部と経済学部とに別れ独立しようとするときであり、本学は、法学部設置のため、先生を金沢大学からお迎えしたのであった。先生の主たる研究分野は、刑法学であり、多くのまた深い内容の研究業績により、先生が刑法学会を代表する研究者であられることはここで改めて記すまでもない。注目すべきことは、先生が、学科主任、教務部長、法学部長などの役職に就いて法学部内外の大学行政を処理される過程で、研究成果の発表のペースを全く落とされなかつたということである。これは、およそ原稿の締め切り日に遅れたことがないとの、驚嘆に値する御執筆姿勢とともに、本学部における永遠の伝説となることと思われる。さらに、先生のゼミ生が、卒業後も先生と強い結びつきを維持している様子を折りに触れわれわれ同僚は拝見しているが、これは、先生が学生たちから慕われるお人柄の表われである。

林深山先生は、一九六四（昭和三九）年四月一日、明治大学法学部より本学部に移られ、以後三三年間、研究教

育活動に従事された。ある時から、先生は体調を崩され、法学部内外の行政職務に就かれることがほとんどなかったため、われわれ同僚がお姿を拝見する機会は少なかつた。これと対照的に、この法学会雑誌（旧研究年報）にはとんど毎号のように研究成果を発表してこられたので、本誌においてわれわれは先生との出会いをすることができたのであつた。先生は、西洋法制史の研究者として、世界的に通用する論述の展開をその御作品において目指されたのであるが、本誌に搭載の論文がほとんどの場合英文であることは、そのことの表われであると同っている。また、先生は、教室での講義や研究室での演習の際には、黒のガウンを着て学生の前に立たれた。そのガウンは、イギリスの大学から贈られた由緒由縁のある大変貴重なものであるとのことだが、そのような教室風景は、林先生にまつわる伝説として語り継がれることであろう。

両先生とも、退職後も変わらず、いや、自由な時間を得てなおいっそう研究に励むおつもりだと宣言なさつて、法学部研究室から去っていかれた。おそらく、この法学会雑誌に、両先生の御研究の成果がたびたび登場するものと思われる。われわれは、両先生からの刺激を受け、いっそう研鑽に努めることを誓う次第である。

一九九七年六月

学習院大学法学会会長 戸松秀典